創造新英雄人物討論小結

陳企霞著（江上幸子訳）

一

文学作品で積極的に新英雄人物を創る問題は、提起以来、討論が行われてすでに久しい。現在の文学創作の実情や、多数読者の文学作品への要望、自己の創作任務をより良く果そうと努める作家の実情から見て、この問題の提起ならびに論争が具体的・現実的意義を持つことは疑いない。

我々の現在の文学に、良いまたは比較的良い作品が全くないのではないが、典型人物を創るという重要任務面で、文学作品は明らかに力不足だと一般に言われている。圧倒的多数の作品が、鮮明な人物形象を描けていない。我々の文学には人物を誤って歪曲して描いたり、公式化・概念化して表現したりという、二つの面の重大な欠点がある。これは文学創作が現実より遙かに遅れているという、不名誉な隠せぬ事実の表れである。

我々の読者は、この遅れに強い不満を表している。人々は闘争や生活の中にあって、文学作品が自分達の偉大な闘争を写す鏡となってくれるよう強く望んでいる。限りなく豊かな現実生活にふさわしい典型人物形象を創ってくれるよう望んでいる。

我々文芸界は、思想改造の幅広い整風学習を経て、闘争に飛びこみ深く生活に入れとの呼びかけに応えている。多くの作家がすでに新たな創作実践を始めた。彼らはその仕事の中で、人物をいかに理解し、いかに描いて典型を創ればよいかなど、様々な実際問題にぶつかっている。

主にこれらの情況から、新英雄人物を創る問題の討論を更に進めることが、必要でもあり有意義でもあると言える。

新英雄人物を創る問題について、提起さえすれば具体的討論は不要と考えることはできない。実際に存在している様々な誤った・混乱した・曖昧な考え方が、更に討論せずともはっきりすると考えることはできない。創作において、また文学創作の組織・指導、及び文芸評論において、数多くの具体問題の解決、或はより深い解決が不必要だと考えることはできない。新英雄人物を描く問題について、文学創作界にもとは意見の違いがなかったが、提起後に討論したため逆に混乱したと考えることは、更にできない — 事実は全く違う。

では事実はどうか。一方では、新英雄人物を創れという課題の呼び掛け・提

唱（この呼び掛け・提唱は全く必要だが）に、程度は様々だが一面的な観点 ― 周到さに欠け全面的でないものや、分析に欠け不明確なもの ― が若干ある。このため必然的に、正しい課題の貫徹または充分な貫徹ができず、多くの誤解曲解さえ生れ、やや混乱した情況になっている。もう一方では、この課題の提起が必然的に、現実に存在している様々な誤った創作思想と抵触しており、やはり広範な討論なしには問題は解決しない。

新英雄人物を創れという要求または呼び掛けをした際、一部の同志は「我々の創作方向」として提起した。この提起法は誤った理解を生みやすい。社会主義リアリズムの創作方法という原則の下で、新英雄人物（または肯定的人物の典型とも言う）を創ることが主要任務であることは疑いない。しかし、この任務が単純化され唯一の創作方向とされると、生活の中の「反面的で腐敗し死に瀕した一切の物、進歩を阻害する一切の物」に作品が触れたとたん、創作方向に違反すると拡大解釈される恐れがある。事実、こうした単純化した思想、及びこの創作任務を孤立させ機械的に理解する思想が、我々文芸界に間違いなく強く存在しており、『文芸報』は討論において多くの関連資料を提供した。一般的創作方向と具体的創作任務とは、関連がなくてもいけないし、混同されてもいけない。方向は唯一と言ってよく、そうでなければ方向を見失うだろう。任務は示された方向の下で、実際には様々であろうし、具体的情況によって軽重緩急の差があって然るべきである。

一部の同志は、積極的に新英雄人物を描けという要求の提起と一緒に、色々な関連問題 ― 例えば、英雄人物描写と矛盾闘争描写との問題、英雄人物描写と「遅れた状態から変貌へ」という公式化反対の問題、及び新英雄人物をいかに正しく表現するか、肯定的人物をいかに創るか等の問題 ― にも言及し、多くの一面的・機械的観点を同時に持ち込んだため、討論が複雑になり論争が起ってしまった。しかしこの論争は、問題をより深め具体化する上で何ら意義がないのではなく、実は具体問題にこそ様々な見解のズレがあるのだから、そのズレを論議すべきであり、それにより、一方では混乱した様々な思想が露呈するかもしれないが、一方では問題が深められ、より実際的で適切な解決が得られるかもしれないのである。そこでこれから、討論で出されたいくつかの重要問題について、分析と批判をしてみよう。

文学作品で積極的に新英雄人物を描けという要求提起が、全く正しいことは何ら疑いない。提起後に起ったかなり広範な論議も、全く必要なものだった。論議の中ではっきりしたことは、文学創作にまだ重要問題がたくさん残され、理論指導・創作・評論の各分野の実践を通じて解決していかねば、我々の文学

作品はレベルアップしないということである。

二

積極的に新英雄人物を創れという呼び掛けやその解釈・説明の中で、同時に言及された最重要問題は、新英雄人物描写と矛盾闘争描写の関係である。この中心問題こそ、曖昧な観念的・一面的論断が数多く出された問題である。ここでは、その主要例だけを挙げておこう。

新英雄人物を描くことと矛盾闘争を描くこととが、同じ問題の両面であることを、一部の人々は実は全く理解していない。彼らは単純に、新英雄人物を描こうとすれば矛盾闘争を描くことはできないと考えている。実際はちょうど正反対で、新英雄人物をリアルに描こうとすれば、矛盾と闘争を描くことを、拒否も回避もできない。英雄人物が行う闘争は常に、遅れた状態を克服するため、矛盾を解決するために行われるのである。英雄人物が闘争外に身を置くとは考えられない。また闘争の中にいる英雄人物が、遅れた事物や人物と関わらず孤立しているとも考えられない。事実、最近の多くの作品は新英雄人物を描いているものの、リアルな闘争から離れているため、公式化・概念化した作品となり、極めて惨めな結果に終っている。新英雄人物を描くことと闘争を描くこととを対立させる論点が、討論において確かに一部に見られたが、これでは全く正しい問題解決はできない。

表面的には矛盾闘争を描けと言うが、実質的には矛盾闘争を全く理解していない主張をする人々もいる。事物の本質についての彼らの解釈から、彼らの事物理解には前提も範囲限定もなく、本質という語を一般的に口にしているにすぎないことが見て取れる。彼らは時・所・条件や、作品で扱う生活範囲にお構いなく、いかなる情況にあっても、肯定的な良いものだけが事物の本質で、否定的な悪いものは必ず非本質だと考えている・・・こうした空理解では、実際には何も説明できない。なぜならある事物の本質とは、その事物の発展法則のことであり、事物は常に矛盾と対立の発展につれ変化するものだからである。具体的対象とその範囲とを規定しなければ、具体的事物の本質が何であるかを考えることはできない。しかも、事物の一面だけを見たり理解したりするのでは、矛盾と発展は理解できない。矛盾の一面だけを本質とするなら、対立と発展は理解できず、いずれかの一面を真に理解することもできない。矛盾の一面を本質と見なす理解は、拡大解釈 ― 作品に遅れた否定的事物・人物が現れるとすぐに、更には発展過程に必然的な一面を描いた時にさえ、それを一律に本質・典型でないとして様々に非難する ― に最も陥りやすい。

以前は多くの人が、否定的人物形象は典型になれないと考えていた。彼らの

考えでは、否定的な遅れた現象は個別的現象に過ぎず、ゆえに本質ではないからである。

中国人民はすでに勝利したのだから、遅れや困難はもう描くまでもなく、ゆえに矛盾や闘争も描く必要はないと考え、更にはそうしてこそ人民の楽観主義が表現できるとさえ考える人々もいる。

また一部の人は、作品に肯定的人物・事物が不足気味であるのに、まだ否定的人物・事物を登場させられると言うのか？何を描くにしろ、敵対人物は登場させてはならない、と考えている。

このほか、ある一部の人は特に武断的で、文学作品の人物形象が読者に与える教育効果の問題を、極めて機械的な公式で解決しようとしている。英雄人物を描けば全ての人を教育できるが（これは全く正しい）、否定的人物や遅れた人物を描くと、たとえ否定・風刺・改造のために描いても、教育効果にやはり「大きな限界」があると彼らは考えている。それは落後分子への教育効果があるだけで、先進的人物や一部の中間分子にとっては、「時には何の教育意義もないか、甚だ影響が小さい」とさえ考えている。こうした公式的な論点は、成り立ちえない。更にはこれを拡大解釈し、生活の真実に基いて作中に遅れた人物を登場させ変貌させたり、反面的・否定的人物を登場させた時に、全く教育意義がないと思わせるようなことがあってはならない。これは実質的な「無葛藤理論」ではなかろうか？「無葛藤理論」が文学創作に与える危害については、ソ連の多くの文学論が明白に論じており、ここで繰り返すまでもあるまい。むろん以上の意見を、どの作品でも肯定的・否定的なものが半々であれという要求だと誤解してはならない。

生活の矛盾闘争を抹殺しようとする、これら様々な似て非なる論点は、どんな言葉を使おうと、実質的にはみな真の新英雄人物を創る道をはばみ、英雄人物の描き方を公式化・概念化するものである。

一部の作家や創作を学ぶ多くの若者は、新英雄人物を表現する創作実践において、生活の矛盾を正しく把握できないために、作中の人物形象を通じ真実の矛盾闘争を表現することは、尚更うまくできないでいる。自己の認識と、生活における矛盾闘争への対処との問題について、明確な解答が得られず、苦悶し、回り道さえしている。そのため彼らは批評を恨んだり、「英雄だらけ」の脚本を書いたり、困難の伴わぬ闘争を描いたりしているが、それが袋小路であることは事実が証明している。

多くの読者もこれらの理論の影響で、色々と極端な意見を持っており、ある人は作品に生活の遅れた面を描くことに無条件に反対し、更には生活の中の困

難を描くことにさえ反対している。人物がストーリーの進展につれ成長発展する過程や、「全てが思い通りにはならない」といったことに触れざるをえない色々な場面には、彼らはむろん特に反対している。

作家達の困難や、一部読者の正しくない意見があるからといって、それが新英雄人物を創れと提唱したためだと責めることは、もちろんできない。文学の創作任務についての正当な要求を、実質上抹殺しようとする様々な意見に、我々は反対すべきである。創作上の困難や、一部読者の現実に合わない非難を全て、この提唱についての解説が綿密さを欠くからだとすることもできない。この困難と非難は実は、創作方法上の主観主義反対や公式化・概念化反対を、いっそう進めるべきことを物語っている。

三

新人物を創る問題の討論における、もう一つの論争の中心は、所謂「遅れた状態から変貌へ」という公式主義的傾向に、どう反対すべきかである。

我々の文学創作には、この非常に重大な公式主義的傾向がかつて存在し、現在も全て根絶されてはいない。この傾向は、限りなく豊かな現実生活を、「遅れた状態から変貌へ」という、単調で味気ない公式枠に入れてしまう作家の多いことを表している。文学作品特有の教育任務を正しく理解できない同志が多いため、この傾向を長い間容認しすぎ、文学作品のレベルアップを大きく妨げて、実質的に文学作品の影響力を弱め、粗製濫造を促してきた。

この傾向が生まれた原因は決して単純ではない。しかも、この傾向を持つ大量の作品には、それぞれに異なる情況がある。それぞれを分析し区別して対処することができれば、問題がより明らかになろう。

実情は次の通りである。所謂「遅れた状態から変貌へ」の公式主義的作品の多くは、作者がブルジョア・プチブルジョア階級の立場に立っているために、新社会の発展の主要側面が見えず、人民内部の欠点を誇張、更には歪曲してしまい、英雄が「ぶざま」になってしまったのである。この類の作品は、我々の文学成果を大いに損なっており、厳重に批判せねばならない。

こうした情況のほかに、「遅れた状態から変貌へ」の作品の一部は、作者が生活に深く入れないか修養不足であるために、その作品にとって実は重要でない芸術効果や教育効果を、むやみに追求しようとして生れていると我々は考える。こうした作品を単純に上述のケースと同一視することは、絶対にできない。文芸界の指導機構も、文芸刊行物の理論批評も、こうした作者に対してなすべき親身の援助が、非常に不充分だと言える。

更に別のケースもある。つまり一部の作品は、人物の変貌を描いてはいるも

のの、生活の真実がかなり描けており、人物形象も正常で、一定程度の成果を収めている。こうした作品（たとえ少数でも）に対しては現在もこれからも、公式主義的作品と慎重に区別し、肯定的に評価した上で、いっそう向上させねばならない。

「遅れた状態から変貌へ」を描いた作品の情況がそれぞれ異なる以上、一方で、英雄形象を創ることは「あの『遅れた状態から変貌へ』とは根本的に対立する」と言いながら、もう一方で、「最初に確認せねばならないが、人物の『遅れた状態から変貌へ』や、遅れた人物の進歩を描くことを・・・全くいけないと言うわけではない」と言うのでは、ロジックの混乱が起きてしまう。

過去のこの傾向の作品をそれぞれ区別して考えることができれば、公式化・概念化に反対する闘争を、より健康的・効果的に進めることができよう。新英雄人物を創れと提唱するなら、現在進められている、文学創作の二つの面の闘争を基礎としなければ、問題を解決することはできない。公式化・概念化傾向への反対はたやすくないことを知るべきである。文学創作の指導に見られる、長年の習慣だが適当とは言えない方法を、徹底的に改めなければ、いつまでも公式化・概念化に反対しきれまい。

我々は創作指導の際、題目を出して作文させるような、単純なやり方をしていないだろうか？極めて狭い観点から、大小や緩急がまちまちな任務の全てを、文学作品の中で解決せよと求めていないだろうか？公式化・概念化した作品の多くが、こうしたことから生れていることを否定できない。「遅れた状態から変貌へ」の作品の多くも、文学作品の教育任務を誤って理解することから生れている。こうした事実を正視しなければ、徹底的に改めることはできない。

新英雄人物を描けと提唱することは、完全に正しい。しかし、社会主義リアリズムの創作方法を学ぶという基本的要求を忘れ、肯定的人物を描くことだけが創作方法であり、また創作方向でもあると考えるなら、我々自身が混乱に陥ってしまうだろう。

新英雄人物を描けと提唱すると同時に、矛盾や闘争をも描き、文学創作を通じて、批判と自己批判のある生活描写をすることを重視せよと強調しなければ、また、人物の発展と成長過程をも描き、闘争の中にいる典型人物を創ることによって、作品をレベルアップすることを重視せよと強調しなければ、別の公式主義に陥ってしまうに違いない。

事実が物語るように、新英雄人物を描いた作品にも同様に、公式化・概念化の傾向が生れている。我々の知る所では、創作指導の際に、生活の現状や作家

・作品の情況にお構いなく、まず英雄のあるべき姿や規準を決め、それから作家を「材料集め」に行かせている同志もいる。こうした方法で問題に対処するなら、最終的には壁にぶつかるが、少なくとも「遅れた状態から変貌へ」の公式主義や、公式主義の新英雄人物が生み出されてしまうことは疑いない。

四

義に殉ずる英雄に一分間の動揺を求める謬論が、早くからあった。この無茶な要求が、一部の作品の英雄が生き生きしていないことを指摘するためのものだったことは、我々にもよく分かる。彼らの考えでは、義に殉ずる前の一分間の動揺を描かねば、英雄が生き生きしないのである。彼らの論理では、一分間の動揺をしない英雄は不可思議なのである。この要求・論理が非常に有害であることは疑いない。彼らにかかずらって、鋼鉄のように少しも動揺しないでこそ真の英雄だと主張するには及ぶまい。むろん、英雄の描写が単純すぎる作品の多いことは事実である。しかし原因は決して、一分間の動揺を描いていないためではない。これは多くの説明をするまでもない道理である。

新英雄人物を創る問題の討論で、英雄の所謂「欠点」を描くべきか否かについて、多くの意見が出た。ある人の考えでは、英雄にはいかなる欠点もあってはならず、またある人の考えでは、英雄に少し欠点を加えねば生き生きしない。ある人々はより単純に、英雄を描くのに絶対に欠点は描いてはならないと言ったり、或は必ず欠点を描かねばならないと言ったりしている。こうして、問題が絶対化してしまった。これは問題提起の方法が誤っていたためであり、もし同じような方法で機械的に答を出そうとするなら、生活の真実から全く離れてしまうことになり、今後は極端に走って論争が止まないことになろう。

ここで言う「長所」「欠点」の概念について、少し検討してみたい。我々はよく、長所プラス欠点という極めて単純な機械的方法で、人を見ようとしがちだ。しかしこの見方は、文学作品の典型描写とは全く別物である。リアリズムが典型人物に求める所によれば、典型人物は絶対に「典型環境」と切り離すことはできない。所謂長所や欠点に、特定の歴史的・社会的条件を離れた、一般的・抽象的な規準がありえようか？ゆえに、人物特有の環境や性格を区別することなく、長所や欠点を空談議しても、作品も人物も理解できはしないのである。

人物を発展の中に置き、その人がどう生活しているかを、歴史的具体性を持って、リアルに描かねばならない。そればかりか更に重要なことには、人がどうあるべきか、どう生活すべきかをも表現せねばならない。つまり、作中人物はリアルであると同時に集約的でもあるべきで、ゆえに、より高度で本質的

でなくてはならない。これはまたマレンコフ同志の報告に言う、「我々の芸術家・文学者・芸術工作者は常に銘記せねばならない。典型とは日常的に最もよく目にする事物であるばかりか、一定の社会的力のある本質的事物を最も鋭く充分に表現することでもある」にあたる。そうでなければ、労働人民を思想的に改造・教育するという文学作品の任務は語るすべがないからである。

現実生活に完全な、または比較的完全な新英雄人物が存在することは少しも疑いがない。彼らは確かに欠点がないか、ほとんど何の欠点もない。概括と想像によって、明るい芸術的形象を創る充分な権利が、作家にはある。この理想的典型人物の創造を全く回避するなら、我々の創作はレベルダウンしよう。むろん、この創造はいっそう難しいものであり、どの作品の肯定的人物にも一律にこれを要求することはできない。しかし難しいからと言って、より有意義な仕事を放棄すべきではない。

英雄と欠点との関連を中心問題と見なし、英雄に欠点があるか否かという誤った提起方法にこだわるなら、討論は混乱に陥ろう。しかし、この問題が提起され様々な論争を引き起したのは、偶然ではない。論争の際、様々な討論会・座談会の発言において、多くの同志がこの問題に答えようとしたが、問題の提起法の根本的誤りには気が付かなかった。ゆえに様々な答も、問題を解決できなかったのである。

なぜ問題の提起法が誤っていると言うのか？まず、問題が提起された原因を分析してみよう。

この問題は、次のような情況下で提起されたのである。つまり、我々の作中人物はあまり感動的でないと考える人々がおり、その様々な理由として、ある人は、英雄人物が堂々と犠牲になる時、内心の動揺を描かないから感動的でないのだとした。またある人は、世の全ての人間に誤りや欠点があるのだから、誤りや欠点のない人物はリアルとは思えないとした。この類の論法は一時期非常に多かった。これは何を物語るのだろうか？我々の肯定的人物の描き方が、充分リアルでないことは事実である。しかしこの論法は明らかに、あまり適当でない論点に立っている。世の中には確かに、何事にも懐疑的態度をとる人がいる。こうした懐疑的態度は、庸俗的で理想を持たない人生観から生れるのである。もちろんそれは、実際の生活や新人物を知らない無知から生れていると言ってもよい。

この問題が提起されるにはまた別の情況もあった。つまり多くの作家、特に若い作家は、生活の中で様々な人物を目にするが、得られる結論は「新人物がいない」になってしまう。彼らは主観的に考える既成の英雄人物そのものを、

生活の中から見つけようとするのだが、それが奇跡を見つけるのと同じく成果のないことは、明らかである。生活の中で、真に英雄と言える人物を確かに発見することもある。しかし一部の作家は、ほんのわずかの聞き取りや訪問取材だけで、こうした人物を理解しようとする。その結果いつでも、聞いていた話と違う結論、つまり、その人物は別にすばらしくもないという結論になってしまうのである。

英雄に欠点を描いてよいかという問題は、主としてこの二つの情況から生れており、この二つの情況が問題提起法の誤りを物語っていると私は思う。第一の情況では、理想のない庸俗的な人生観が、新人物を描けなくしているのであり、第二の情況では、人物を創る労働に対し、真剣で勤勉な労働態度が欠け、現実生活を集約して概括と想像を加えるという、一連の労働内容を理解していないために、新人物を認識することも、表現することもできないのである。

こうした情況に対して、単純に英雄人物の欠点を書くなと答えるだけで、問題提起法の誤りを分析しないなら、問題は解決しないばかりか、逆に誤解を引き起し、英雄の性格に発展・成長がなくリアルでないという結果を生んだり、英雄を闘争や事物の矛盾から引き離して、リアリティのない公式化した「旧劇の隈どり」にしてしまうことになる。

討論において、この誤った提起法の罠にかかった人々に三種類ある。

第一種の人々は、人物が生き生きと描けないのは恐らく欠点を描かないためであり、実際に目にする人物に全て欠点がある以上、英雄にも欠点を描いてよいと主張している。この解答の誤りについては、すでに上で批判した。第二種の人々は正反対で、英雄は欠点がなく、あったら英雄ではないと主張している。英雄に欠点を描くなというこの論理は、第一種の見解と鋭く対立しているように見える。しかし実際は、多くの作品に描かれている肯定的人物・英雄人物の具体的情況とも合わないし、現に存在している新英雄人物の公式化・概念化という欠陥も解決できない。ゆえに、この論点も常に破綻をきたしてしまう。

こうして第三種の人々が現れる。彼らは上の二種類の見解が共にやや具合が悪いのを見て、欠点は描いても描かなくてもいいと言う。ではどんな風に自己の論点を十全にするのか？彼らは「品性」という宝刀を捜しあてたのである。しかし実はこれも、もったいをつけた言葉に置きかえたに過ぎない。固定化した抽象的概念であり、実質的に、英雄の規準をあらかじめ規定する方法と何ら変りがない。品性を具体的な歴史・社会条件から離れて論ずるすべはなく、品性とは、特定の歴史条件下の闘争において要求される政治的性格のことであ

り、鍛えられてできていくものであることを、彼らは理解していない。彼らは、品性に関わる欠点は描いてはならないが、品性の欠点でないものは描いてもいいし、描くべきであるとさえ言う。表面的には、こうした論法は公平に見える。上の二種類の相反する意見に、同時に一つの「出口」を示したわけだが、彼ら自身が罠、しかも本当の罠にかかっていることには全く気が付いていない。

欠点を結局は描いていいのか否かに答えられず、彼らは「英雄の品性について言えば欠点があってはならず、生活の作風や個別の欠点なら描いてもよい」と言う。これは妥協的な言い方で、問題が解決しないばかりか、いっそう思想上の混乱を生むと私は思う。品性に関わりない作風があろうか？作風に関わりない品性があろうか？ありえない。チャパーエフ［訳注１］を例にとって尋ねるが、彼が農民出身のため規律の重要性がわからず、党の指導に服従しないのは、品性に全く関わりないとは言えまい。関わりないとすれば、農民の品性は労働者の品性と一緒になってしまう。しかも、チャパーエフにはすばらしい政治委員の指導もいらないことになる。

品性を抽象化したり、どんな人物かに関わりなく、品性に極めて単純な定義を与えてしまうことをしてはならない。例えば、チャパーエフの置かれた具体環境を離れて彼の品性は理解できない。英雄に対する理解として、「品性が改造されてこそ英雄」とは言えず、これでは品性を固定化してしまう。品性と作風の混同に反対すべきだが、両者を画然と分けることにも反対すべきである。旧支配階級に断固反対するのは、どんな革命家も持つべき基本的品性で、そうでなければ全く新人物・肯定的人物たりえない。

完全な人物が存在し、しかも日を追って増えていることは認めるべきだが、「完全」もまた歴史条件から切り離すことはできず、ある時期の完全が、また別の歴史条件下でも完全とは限らない。チャパーエフの置かれた時代には、彼は確かに完全な人物だった。彼は当時の農民出身の英雄的品性として、その時代の歴史条件から生まれたのであり、つまり典型環境における典型性格なのである。

気高い品性も、自己闘争を必要としないのではない。自己の欠点を常に克服できることこそが気高い品性である。「英雄であるからには、品性はすっかり改造されているのだから、更に欠点を描くべきではない」と言う人もいる。これは必ずしも正しくはなく、なぜなら、今日は完全でも明日には欠点が生れ、自己闘争を必要として、更に完全へと向かうかもしれないからである。特定の歴史・社会条件を離れて品性を論じられないということは、典型環境から切り

離して典型性格を規定できないということである。品性を一つ、またはいくつかの概念として漠然と説明することはできない。それはやはり公式化・概念化した方法である。

以上、多くの討論において論争が止まなかった情況について、少し説明をした。

では問題は一体どこにあるのか？それは一部の同志が、まず問題提起法と提起された原因とを考察せずに、あまりに果断に問題を解決しようとした点にある。

実際には、英雄人物の欠点を描かざるをえないという問題提起が、例えば懐疑的哲学から生れているなら、その哲学の危害を暴露せずに欠点は描くなとだけ答えても、問題が解決しないことは明らかである。こうした人々に対しては、胡喬木同志がある報告で大変厳しく批判したことがあり、その批判は全く必要だと私も思う。例えばまたこの問題が、新人物を理解しないため、無知のために提起されたものなら、欠点を描いてよいの悪いのと答えても、問題解決にはならない。もし、より良い作品を書きたいとの善良な意図で提起されているなら、こう答えることができよう。一、人を単純に長所と欠点を足したものと見なすのは正しくない。二、生活中の人物と芸術作品中の人物を混同し、芸術作品における典型人物の創造を全く理解しないなら、問題は解決しない。三、作品の肯定的人物の具体的情況に関わりなく、多種多様な人物を全て極めて単純な方法で内容規定しようとするなら、問題はやはり解決しない。

我々は、それぞれの情況に応じて問題を解決すべきだと考える。上述の第一種のケースについて言えば、欠点のない完全無欠な最高級人物を文学芸術作品に出現させるよう求める権利が、我々には充分ある。生活の中でも、個別の英雄にこれを見出せるばかりか、覚醒した広範な工農兵の中にも、新人物・事物として充分に概括し集約できるものが生れている。これを基礎に、典型的で完全無欠な肯定的人物を創る権利と可能性を、我々の文学作品は充分に持っている。我々はこれを作家の最重要任務、創作における最高の成果として要求する（『偉大な市民』のキーロフ［訳注２］のように）。しかしむろん、いかなる作品、また作中のいかなる肯定的人物にもこれを求めるのだと誤解してはならない。

第二種のケースについて言えば、肯定的人物が様々な闘争の中に身を置くと共に、自己の欠点とも闘争するという描写を、一定のテーマと作品範囲内で許すべきである。欠点の克服を描くために人物の欠点を描くなら、またその設定内で人物が生活の真実と合致しているなら、欠点を描くことは完全に許され

る。なぜならそれは、自己の欠点を克服するために闘う崇高な品性（チャバーエフのように）を描くためだからである。

次に第三種のケースについてだが、特定の典型環境が生んだある種の人々 — 例えば覚醒過程の労働者、成長中の農民、変貌中の知識分子など — が、闘争において、基本的には正しいが完全無欠ではなく、作品の扱う範囲内で自己の欠点に完全には打ち勝てないような場合にも（むろんチャバーエフのように打ち勝ってもよいが）、題材範囲内でそれを具体的に批判または一部批判するためなら、戒めとして彼らの欠点を描くことはむろん許される。

以上のように、それぞれを区別し、生活の実情に基いて問題を解決すべきである。しかしこれを単純に、上述の懐疑哲学と同様の主張、つまり、英雄人物がどんな情況にあろうと欠点・長所を半々に描くべきだとか、欠点を描かなければ生き生きしないという主張だと誤解・曲解しないでもらいたい。我々の考えはむろん上述の第二・三種とも異なっている。なぜなら我々は、多種多様な新英雄人物の品性に極めて単純な、だが極めて有害な定義を下そうとはしないからである。しかし文芸創作の指導部門には、こうした情況の中で「定義」を下そうとする人が常にいる。我々は随時、より良く自己の任務を完成するよう作家に呼びかけるべきであり、また、真剣に文芸批評を行い、作中人物を論評すべきでもある。しかし、作家に人物描写の万能薬を配るべきではなく、そのような「万能薬」は実はありもしないし、あるべきでもない。

討論での問題点から考えると、更に次の指摘をしておかねばならない。具体的人物の具体的情況をうまく識別できないために、自分の主観的要求に合わないものは何でも、全て人物の欠点と見なしてしまう同志の多いことである。作品で人物を描くには、個性がなくてはならない。典型は必ず個性を通じて表現されるべきである。人物の個性の特色を欠点と見なしてはならず、英雄人物はむろん人民の理想を代表する者だが、この理想は決して一般化した方法では表現できず、必ず具体的個性を通じて表現されるものである。世の中にもし所謂個性のない人がいるとすれば、彼は絶対に英雄ではない。個性描写と典型性描写は、統一的に発展するものである。所謂人物の個性とは、様々に具体的な生活条件の中で形成される、具体的性格のことである。この性格の特色を軽視したなら、生き生きした人物は創れない。あらゆる性格の特色を、極めて単純な方法で長所と欠点とに分けるなら、深く人間を認識することはできまい。

次にもう少し説明しておかねばならない。一般的に言って、作中人物には必ず成長過程における発展があるべきで、作中人物が一定のストーリー進展につれ様々に変化するのは、必然的な過程である。長所プラス欠点という単純で固

定化した方法では、それは全く解釈できないし、全ての人物の成長過程を、「遅れた状態から変貌へ」という極めて単純な公式と一致するもの、と考えるべきでもない。生活の発展の複雑な多様性を、そのように一つのワクに入れてしまっては、庸俗化してしまう。問題はその成長が真実であるか否か、合理性を持つか否か、具体的な歴史条件・客観環境およびその発展と、きちんと一致するか否かにある。つまり典型性格と典型環境とが、完全に人を納得させられるように一致し、分裂や断絶がないか否かにある。

我々の一部の読者には、生活経験や修養の不足から、事実に基いて作中人物の発展過程を理解することができず、不合理な要求をする人がよくいるが、そういう人々には説明が必要である。

最後に、作中人物がぶつかる困難や失敗、或は闘争における誤りや挫折を、全て英雄に欠点があるためだと見なしてはならない、と指摘しておく必要がある。実際の生活条件・歴史条件を踏まえることができるなら、様々な困難・失敗・誤り・挫折の法則と、英雄人物がいかにそれらを克服し勝利を得るかの具体的過程とを、より良く理解することができよう。

明らかなことは、こうした事実に基く認識がなければ、より良い人物理解と人物描写ができないことである。

五

新英雄人物創造の討論で主に論じられたのは、新英雄人物描写と生活の矛盾闘争描写との問題、所謂「遅れた状態から変貌へ」の公式主義にいかに反対するかの問題、新英雄人物に欠点を描くべきか否かの問題の三点であり、その中心は、新英雄人物描写と生活の矛盾闘争描写に関する問題であった。

我々は討論の過程で、無葛藤理論に反対するソ連文芸界の文章をたくさん紹介したが、大いに参考価値があった。マレンコフ同志の報告中の文学に関する指示は、特に遵守せねばならない。なぜなら社会主義リアリズムの創作方法に関する基本問題 ── 人物の典型を創る問題を、彼ははっきりと解決しているからである。

我々の文学作品のレベルが低く、文芸創作に重大な遅れが見られるのは、今日の偉大な現実をリアルに反映することがまだ上手にできず、現実生活における様々な日進月歩の変革や、その変革から生れる新しい様相・事物を、観察し分析し表現することも上手にできない作家が多いためである。我々は殊に、労働人民の気高い品性と生き生きした英雄的気概を表現することに巧みでなく、作品を通じて生活の輝かしい前途を示すことにも、同じく巧みではない。

これら全ては、我々が更にしっかり努力し、迅速に前進すべきことを物語っ

ている。

こうした意味から言えば、今回討論された新英雄人物をいかに創るかの問題は、実質的には、我々の文学創作の具体的情況に照らして、いかに正確に現実を反映するかの問題であり、いかにより良く社会主義リアリズムの創作方法を学ぶかの問題でもある。なぜなら、我々の文学創作の発展段階について言えば、新英雄人物の描写であれ、生活の矛盾闘争の描写であれ、二つの面の誤り・欠点が常に生れているからである。つまり、英雄人物と矛盾闘争の選択面において、政治的な立遅れや誤りを持つ作品があるかと思えば、英雄人物と矛盾闘争の表現面において、芸術的に概念化・公式化した作品が生れているのである。このことは、社会主義リアリズムの創作方法を断固貫き、二つの路線の闘争、つまり「一方で、文芸が政治から離れる傾向に反対し（この傾向は実質的に、文芸をブルジョア階級の利益に服務させる）、もう一方で、概念化・公式化が文芸と政治の正しい結合に取って代わる傾向に反対する（この傾向は実質的に、文芸が政治に服務する真の目的を破壊する）」という闘争を進めねばならないことを証明している。この二つの傾向が共に、社会主義リアリズムの創作方法の基本から遠くかけ離れたものであることは、言うまでもない。

［訳注］

1、ソ連の長編小説『チャパーエフ』（一九二三年、ドミートリイ・アンドレービチ・フールマノフ作）の主人公

2、ソ連の映画『偉大な市民』（一九三〇年代後半、フリードリッヒ・エルムレム監督）の主人公

＊本論文は、一九五二年に『文芸報』で行われた「新英雄人物創造の問題に関する討論」の中間総括として、陳企霞が執筆したものと考えられる。討論会で口頭発表されたが、すぐに批判を受け、文書による発表はずっと許されなかったものらしく、中国では現在もなお未発表である（こうした経過については、拙論「陳企霞批判と『創造新英雄人物討論小結』」『中国研究月報』一九八九年四九二号参照）。訳者はこれを手稿コピーから訳出したが、長期間の紙質変化のため、加筆部分については完全な判読が難しく、また加筆による大意の変更はないと判断されることから、この部分の訳を省いた。また、ごく一部だが破損部分があり、前後から推測して訳した。